



9月22日に政府は高速増殖原子炉「もんじゅ」(福井県敦賀市)に関して「廃炉を含め抜本的な見直しをする」と声明を出しました。当然です。1991年に運転開始後、事故続きで停止中です。関わった人々は安全で経済効率の高い理想的な「夢の原子炉」と「呪文」を唱えてきたのです。東京新聞によれば、今まで1兆2千億円を費やし、廃炉にするにしても30

年の期間と3千億円の費用を要するとのこと。日本の年間予算が96兆円ですから、数字に弱い私でも、莫大な支出だと感じますし、この限界状況はすべての原発と同じだと思います。

約30年前に青森県六ヶ所村に高濃度放射能廃棄物の再処理工場が建設されるということを知り、青森大好き人間の私は、非常にショックを受けました。原発の使用済み核燃料棒を再処理するとはどういうことか。含まれているプルトニウムを取り出すということです。そのために瀬戸物状に固めて放射能を閉じ込めている燃料棒を化学的な操作をして、どろどろに溶かして、燃え残りのウラン、核の灰、プルトニウムに分ける。貯まったプルトニウムを再び燃料にすれば、「もんじゅ」で原発のサイクルができるというのです。再処理する段階で、半減期が6400年のプルトニウム等、放射性元素が数種類放出されます。有毒な放射能を放出するものを「中間」というカモフラージュの言葉をつけて貯蔵し、再処理するなど、一体誰が責任を負うというのでしょうか。約30年間に7兆3千億円の税金を投入したと言われてはいますが、事故続きで、再処理工場としての稼働はできず、廃棄物だけは貯まってきているのです。「もんじゅ」と同じ状態なのに、再処理工場の日本原燃の工藤社長は、今日「我々は再処理した燃料を通常の『軽水炉』の原発で使う『プルサーマル』のサイクルを確立する事業に全力を傾けている。もんじゅとは関係なく事業は進められる」と述べ、仮に「もんじゅ」が廃炉になったとしても、六ヶ所村の核燃料サイクル事業に影響はないと、なんの責任も反省も見られない発言をしています。

青森には東通原発(停止中)、大間原発(建設中)、六ヶ所再処理工場(未稼働)があり、原発銀座になっていますが、六ヶ所に関連するニュースを見ると、恐ろしいです。**落雷による約30の機器故障、収納容器のうち9つの容器の底と、収納容器の外側にある空気を送る通風管80本うち67本にそれぞれさび、保管施設に運ぶコンテナで、ふたを固定するボルトが折れるトラブルが相次ぐ、高レベル放射性廃棄物の廃液の漏れを監視する機器などあわせて29の機器が相次いで故障、配管を支える部品の一部が短く切断されたのが見つかり同様の不適切な工事がおよそ7000か所、直近の6月27日には、使用済み核燃料を貯蔵する建屋に設置された非常用の電源装置が故障**など、次々と報道されています。どちらに転んでも、原子力を燃料とする考えは、結果を見ても、悪魔的な幻想であり、安全を唱える人は「呪文」を口走っているとしか思えません。

福島原発事故が起きた時、放射能の毒が大量に大気に、大地に、大海に放出されました。自然は汚染され続けています。野生生物は逃げようもありません。事故処理は過酷を極めていきます。命を守るために、文殊の知恵を振り絞ってほしいと願っています。